

28P-pm326

耐糖能異常による尿中蛋白への影響の検討

○竹田 祥子¹, 藤本 哲也¹, 武智 茂², 柿木 滋夫³, 神田 孝一⁴, 小林 毅⁵,
野村 憲和¹(¹北海道薬大, ²伊達赤十字病院, ³小樽協会病院, ⁴札幌厚生病院, ⁵社会
保険北海道健康管理センター)

【目的】近年我が国の慢性維持透析患者数は年々増加し、透析療法導入原疾患の第一位を糖尿病性腎症が占めている。糖尿病性腎症は透析導入後の生命予後も不良であり、早期に診断しかつ的確な治療を開始することが重要である。糖尿病性腎障害の指標として、尿中アルブミンが有用とされてきたが、尿中にはアルブミン以外にも様々な蛋白が存在しており、それら多くの尿中蛋白に関する知見はまだ十分とはいえない。本研究では、耐糖能異常が尿中排泄蛋白に及ぼす影響を検討した。

【対象及び方法】正常血糖かつ正常血圧者 151 名（平均年齢 57±4 才;身長 164±8cm;体重 62kg±10kg;BMI23.2±3.0）及び正常血圧かつ治療を受けていない空腹時血糖 126 以上または HbA1c6.5 以上の耐糖能異常の認められる 22 名（平均年齢 53±9 才;身長 168±7cm;体重 70±13kg;BMI24.8±3.6）を対象とした。対象者の午前中自然排尿を採取し、尿中蛋白及び尿中クレアチンを測定した。SDS-PAGE で尿を電気泳動し、尿中蛋白を分離後、得られた各蛋白分画の割合と総尿中蛋白量（尿中クレアチニン値で補正した値 [mg/gCr]）の積により該当分画蛋白量を算出し、耐糖能異常者の尿中蛋白を検討した。

【結果及び考察】総尿中蛋白量は正常群に比べ耐糖能異常群では有意な上昇が認められた。SDS-PAGE では対象者 173 名において 15 の共通した分画が認められ、耐糖能異常群では 192kD、82kD、64kD、54kD、48kD、35kD、27kD において有意な上昇が認められた。40kD より高分子量の糸球体性蛋白だけでなく、低分子量の尿細管性蛋白にも影響がみられた。耐糖能異常による腎機能障害はネフロン全体に影響を及ぼしていることが示唆された。